

Longman Pronunciation Dictionary

改訂第3版に見る英語発音の変化

藤本 和子

1 言葉は絶えず変化を続けるものであるから、辞典の役目は、その変化をとらえ言語事実として反映していくことにより、辞典使用者をサポートすることであろう。また、学習者用の辞典の編纂には、学習への辞典活用といった教育的配慮もなされなければならないだろう。グローバル社会にあって英語の変化、特に音声面の変化は以前にもまして速度を増していることは想像に難くない。英語使用者や英語学習者が音声面での現状や変化をつかむための案内役ともいえるのが発音辞典である。このたび2008年にJ. C. Wellsの*Longman Pronunciation Dictionary*第3版(LPD³)が出版された。LPDは、1990年に初版(LPD¹)が出版され、2000年に第2版(LPD²)が出版されている。改訂第2版については藤本・山本(2001)を参照していただきたい。

本稿では、主にLPDの意見調査(opinion polls)(後の節で言及)でLPD³において発音の変化が見られた項目から、どのような変化が見られるのかをつかみ、そしてそれらについて、2006年に出版された*Cambridge English Pronouncing Dictionary*第17版(EPD¹⁷)¹⁾と比較し、さらに、EPD¹⁷の他に、アメリカ英語発音に変化が見られた項目については、2008年に出版された*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*第3版(CALD³)、*Cambridge Dictionary of American English*第2版(CDAE²)、及び*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*(MWALED)²⁾と、イギリス英語発音に変化が見られたものについては、CALD³、MWALEDの発音の表記と比較し、現在の英語発音の変化の様相をつかむことを目的とする。さらに、LPD³では、主要発音は黒色のボールド体で、変異発音

は通常の黒色活字で印刷されている。LPD³は、主要発音は“recommended as models for learners of English” (p.xiv) としており、英語学習者がまず習得するとよいのはこの主要発音ということになるであろう。したがって、主要発音は発音習得のターゲットとしてまず注目される。ところが、LPD³が主要発音として記載している発音が他の辞典では必ずしもそうでない項目がある。辞典の間で発音に関してどのような表記の違いがあるかを見ていくことも本稿のねらいの一つである。

2 まず、LPDの特徴や、LPD³での変更点などを見てみよう。

2.1 LPD³は、LPD¹、LPD²に引き続き、国際音声学協会制定の国際音声字母 (IPA) を用い、イギリス英語とアメリカ英語の両方の発音を記載している。イギリス英語は、正しい発音のモデルとして、特に教育を受けた人の改まった発音とみなされている容認発音 (Received Pronunciation: RP) を記載している。LPD³には、RPは、“the usual standard in teaching English as a foreign language, in all countries where the model is BrE rather than AmE” (p.xix) とある。RPは従来のRPよりもその範囲を広げているが、LPDもそのような変化に応じたRPのとらえ方をしている。また、RPとはみなされないが、教養ある話し手の間で広く使用されている発音も § の記号付きで記載している (LPD¹では†が用いられていた)。これはLPDが、教育上推奨される発音のみでなく、現在のイギリス英語の発音の実態、つまり言語事実をそのまま映し出そうとする立場をとっていることを示しているといえよう。アメリカ英語は、大多数のアメリカ人によって使用される発音、つまり、東部発音と南部発音以外の発音である一般アメリカ英語 (General American) が記載されている。LPD³には、General Americanは、“the appropriate model for EFL learners who wish to speak AmE rather than BrE” (p.xx) と記述している。

2.2 LPDの大きな特徴は、その意見調査 (opinion polls) にあると言ってよいであろう。語に複数の発音がある場合、それらの発音についてアンケート調査をし、イギリス英語とアメリカ英語の発音について主要発音と変異発音を記載している。語

によっては主要発音と変異発音の間にどのくらいの差があるのかパーセンテージで示してくれているので参考になる。LPD¹以来この意見調査結果は取り入れられ、LPD¹では、発音の好みのパーセンテージのみの記述であったが、LPD²では、主要発音と変異発音のパーセンテージが棒グラフで、世代別の好み折れ線グラフで表わされるようになり、LPD³ではLPD²の棒グラフが円グラフに変わり、使用者にとってさらに見やすく、情報がつかみやすくなったといえよう。LPD³は以下の5つの意見調査に基づいており、下記 (iv) と (v) の2つの意見調査がLPD³で新たに取り入れられたものである。

- (i) 1988年、275人のイギリス英語母語話者に対する郵送方式意見調査 (著者 Wells氏による調査) [BrE 1988 poll]
- (ii) 1993年、400人のアメリカ英語母語話者に対する郵送方式意見調査 (設楽優子氏調査担当) [AmE 1993 poll]
- (iii) 1998年、1932人のイギリス英語母語話者に対する郵送、e-mail、オンライン方式意見調査 (著者 Wells氏による調査) [BrE 1998 poll]
- (iv) 1999年から2002年、アメリカ英語の発音のオンライン方式意見調査 各調査項目への回答数およそ11,000。回答者の年齢の詳細は不明 (Bert Vaux氏による調査) [AmE 1999-2002 poll]
- (v) 2007年4月から6月、イギリス英語の発音のオンライン方式意見調査 有効回答数は調査した項目によって違いがあるが、800-825 (著者 Wells氏と Pearson Educationによる調査) [BrE 2007 poll]

LPD²までは、発音に関する数値がどの意見調査の結果に基づくものか年号が示されていたが、LPD³からは年号が示されなくなった。BrE 1988 poll からは20年の月日が経っており、LPD¹とLPD²で用いられた意見調査と、LPD³で新たに取り入れられた2つの意見調査結果を同じように記載するのは辞典使用者としては残念なことである。LPD³のIntroductionにおいて、どの語の意見調査がどの意見調査に基づくのかという詳細は著者 Wells氏のUCLウェブサイト (www.phon.ucl.ac.uk/home/)

wells) を参照とあるが、2008年10月7日現在、AmE 1999-2002 pollで調査された語について詳細が掲載されているわけではない。

著者Wells氏の上記ウェブサイトの情報によると、AmE 1999-2002 pollで調査された語には *almond*, *asterisk*, *caramel*, *chromosome*, *Presley*, *Thanksgiving*, *thespian* などが含まれる。BrE 2007 pollは、30項目について、多肢選択式でそれぞれの語の2つ、あるいはそれ以上の発音の選択肢から回答者が好ましいと思う発音を選ぶ形式である。BrE 2007 pollで調査された30項目は次の通りである。 *accept* / *except*, *adult*, *applicable*, *Asia*, *careless*, *contribute*, *debris*, *diphthong*, *dissect*, *during* (initial consonant and stressed vowel), *egotistic*, *electoral*, *H*, *homogeneous*, *hurricane*, *impious*, *kilometre*, *lamentable*, *liquorice*, *mischievous*, *necessarily*, *omega*, *poor*, *protester*, *tinnitus*, *tune*, *via*, *were*, *yours*。³⁾

LPD²までは、英語学習者にモデルとして推奨される主要発音は薄い青色活字で印刷され、その他の変異発音は黒色活字で印刷されていたが、先にも述べたようにLPD³では、主要発音は黒色のボールド体で、変異発音は通常体の黒色活字で印刷されている。いずれにしても、学習者にとっては主要発音と変異発音を区別しやすいといえよう。

2.3 LPD³における発音表記の全般的な変更点として以下のものが挙げられる。

- (i) **be-**, **de-**, **e-**, **pre-**, **re-**, **se-** などを含む語の発音は、これらの接頭辞の母音が強勢をもたない場合は、/i/の音で表わす(これらの接頭辞の母音は変異発音/ə/ももっている)

例えば、**befriend**の(英/米)の主要発音の表記はLPD²では /brɪˈfrend/であったが、LPD³では /biˈfrend/ となっている。LPD²、LPD³ともに、(英/米)の変異発音として /bə-/ を掲載している。

- (ii) /tʃu:/, /dʒu:/に由来する /tʃu:/, /dʒu:/ の発音に付されていた § の記号が取り外

された

これは、著者Wells氏がBente Hannisdalのcontemporary RPの研究に従ったものである。例えば、**student**を見ると、LPD²でイギリス発音 /ˈstju:d-/ の発音に付けられていた § の記号はLPD³では取り除かれている。これは、/tʃu:/, /dʒu:/ の発音がRPであるとみなされることを示している。

- (iii) **wh-**を綴りにもつ語のアメリカ英語での /hw/ の使用が減少していることから、アメリカ英語学習者に推奨する発音を変更した

例えば、**what**のアメリカ発音を見ると、LPD²の(米)主要発音は /hwʌt/ であったが(/h/ がイタリック体になっているのは、この音が時々随意に省略されることを表わす。以下同様)、LPD³では、/wʌt/ が(米)主要発音となり、/hwʌt/ は(米)変異発音となった。

2.4 一般的な辞典と比べて、発音辞典であるLPDの特徴は、「変異発音」、「変化形」、「派生形」、「固有名詞」の発音がより豊富に記載されていることである。LPD³では3,000の見出し語が新たに加わり、人名、地名を含む225,000を超える発音情報が記載されている。LPD²では135,000以上の発音情報が記載されていたことからすると、およそ1.7倍の情報量の増加である。著者Wells氏の上記ウェブサイトの情報によると、新たな見出し語には以下のものが含まれている。

- (i) 固有名詞 : *Aung San Suu Kyi*, *Obama*, *Whampoa* など
- (ii) インターネット関連用語 : *blogging*, *Google*, *podcast*, *Wikipedia*, *YouTube* など
- (iii) その他 : *bird flu*, *Botox*, *latte*, *nanobot* など

これらを見ると、メディアでよく取り上げられる固有名詞や、科学技術の発達、医学

に関するものなど時代や世界の動きを反映したものが多く含まれることに気づく。外来語も新たに取り入れられ、*LPD*¹ 以来の方針で元の言語の発音と英語化した発音の両方を載せている。例えば、日本語からは*sudoku*などが新たに取り入れられた。

3 本稿では、先に述べた意見調査のうち、*LPD*³で新たに結果が取り入れられた AmE 1999-2002 poll、BrE 2007 poll で調査された語について見てみよう。

主として、アメリカ英語発音は、*EPD*¹⁷、*CALD*³、*CDAE*²、*MWALED*と、イギリス英語発音については、*EPD*¹⁷、*CALD*³、*MWALED*の表記と比較検討する。*EPD*¹⁷以外の辞典の発音表記と比較するのは、*EPD*¹⁷は*LPD*³出版の2年前の2006年に出版されており、2年間のギャップがあるためである。したがって、発音辞典ではないが、2008年に出版された最新の辞典の中から、*EPD*¹⁷と同じCambridge University Pressから出された*CALD*³、*CDAE*²、及び、アメリカの出版社であるMerriam-Webster, Inc.出版の*MWALED*の発音の表記と比較することにした。

比較検討するにあたり、*EPD*¹⁷の発音選択の方法について、*EPD*¹⁷のIntroductionには次のようにある。“Ultimately, . . . the decisions about which pronunciation to recommend, which pronunciations have dropped out of use, and so on, have been based on the editors’ intuitions as professional phoneticians and observers of the pronunciation of English (particularly broadcast English) over many years. The opinion of many colleagues and acquaintances has also been a valuable source of advice” (p.vi). どの発音を推奨するかなどについて、*EPD*¹⁷は主として編集者たちの見解に基づいていることがわかる。発音についての意見調査に基づくデータを入れるのは*LPD*の特徴といえよう。

本稿での略記のし方について断っておきたい。*LPD*²、*LPD*³はイギリス発音とアメリカ発音の主要発音をそれぞれ(英主)、(米主)、変異発音をそれぞれ(英異)、(米異)と略記する。英米の発音が同じである場合は、それぞれ((英/米)主)、((英/米)異)とする。*EPD*¹⁷は“Pronunciations are shown in order of frequency” (p.xvi).とあるため、*LPD*²、*LPD*³と同様に略記する。*CALD*³では、イギリス発音とアメリカ発音で違いがある場合は、両者を分けて掲載している。発音表記について筆者の間

い合わせに対して、Cambridge University PressのELT Dictionaries and Corpus Cambridge University PressのPublishing ManagerであるPaul Heacock氏から、“Generally speaking, . . . the first of two pronunciations is thought to be the more common.”との回答を得た。⁴⁾ イギリス発音とアメリカ発音それぞれ最初の発音を(英主)、(米主)、2番目の発音を(英異)、(米異)とする。イギリス発音とアメリカ発音が同じであれば、((英/米)主)、((英/米)異)と記す。*CDAE*²は、発音表記について筆者の問い合わせに対してPaul Heacock氏から、“. . . if more than one pronunciation is given, the first is thought to be the most frequent.”との回答を得た。⁵⁾ 発音が2種類以上掲載されていれば、最初のを(米主)、2番目以降のを(米異)とする。*MWALED*は、発音表記についての筆者の問い合わせに、Merriam-Webster, Inc.のEditor of PronunciationであるJoshua S. Guenter氏から、“In the rare case that more than one pronunciation is given for a word, all the pronunciations listed should be considered as equally common. That is to say, they should all be considered ‘main’ pronunciations.”との回答があった。⁶⁾ したがって、発音が1種類のみ掲載されていれば、(米主)とし、2種類の場合は、最初の発音を(米主1)、2番目のものを(米主2)のようにする。*MWALED*はまた、本辞典の使い方の説明によると、イギリス発音がアメリカ発音と非常に異なっている場合にイギリス発音も掲載している(注2)を参考のこと)。イギリス発音もアメリカ発音と同様に(英主1)、(英主2)のように略記する。

3.1 AmE 1999-2002 pollで調査された語について、*LPD*²と*LPD*³で発音に変化があり、かつ、*LPD*³の主要発音と、本稿で比較した他の辞典に掲載されている主要発音との間で表記の違いが見られる項目をいくつか見てみよう。

(1) **almond**

*LPD*² ((英/米)主)は /ˈɑːm ənd/ である。

*LPD*³ *LPD*²でBrE non-RPであった /ˈɑːlm ənd/ が、(米主)となった。(米異)

は /^hælm-/、/^hɑ:m-/、/^hæm-/ である。AmE 1999-2002 pollの結果、アメリカ発音で、/l/ が入る発音が75%、入らない発音が25%であった。(LPD³では(米主)及び、すべての(米異)に /^hælm-/、/^hɑ:m-/ などのように第2強勢を表わす記号が付されているが、これは間違いで第1強勢の記号が付されるべきであることを著者Wells氏に筆者が私信で確認している。⁷⁾したがって本稿では第1強勢に修正してある。)

EPD¹⁷ (米主)は /^hɑ:mænd/ で、(米異)は /^hɑ:l-/、/^hæ:l-/ である。

CALD³ (米主)は /^hɑ:l.mænd/ である。

CDAE² (米主)は /^hɔ:l.mænd/ で、(米異)は /^hɔ:l-/ ; /^hɑm.ænd/、/^hɑl.mænd/ である。

MWALED (米主)は /^hɑ:mænd/ である。

AmE 1999-2002 pollによると、/l/ が入る発音とそうでない発音で、それぞれ75%と25%のように大きな開きがある。CALD³もLPD³と同様、/l/ の入る発音が(米主)である。しかしながら、EPD¹⁷、CDAE²、MWALEDでは /l/ の入らない発音が(米主)であり、/l/ のあるなしで辞典の表記に違いがある。

(2) chromosome

LPD² (米主)は /^hkroum ə soum/ である。

LPD³ LPD²で(米主)であった /^hkroum ə soum/ が(米異)となり、新たに、/^hkroum ə zoum/ が(米主)になった。AmE 1999-2002 pollの結果、/-zoum/ が55%で、/-soum/ が45%である。

EPD¹⁷ (米主)は /^hkrou.mə.soum/ である。

CALD³ (米主)は /^hkrou.mə.soum/ である。

CDAE² (米主)は /^hkrou.mə.zoum/ で、(米異)は /^h-.soum/ である。

MWALED (米主)は /^hkroumə.soum/ である。

この語の /-z-/ と /-s-/ の発音をめぐって、辞典の間に表記の違いが見られる。LPD³で新たに /-z-/ が(米主)になったのはAmE 1999-2002 pollの結果を反映している。CDAE²も /-z-/ の発音が(米主)となっている。一方、EPD¹⁷、CALD³、MWALEDは(米主)として、/-s-/ の発音を掲載している。AmE 1999-2002 pollでのそれぞれの発音が55%と45%であることから、主要発音と変異発音が競い合っていると見えようか。

3.2 BrE 2007 pollで調査された語について、LPD²とLPD³で発音に変化があり、かつ、LPD³の主要発音と、本稿で比較した他の辞典に掲載されている主要発音との間で表記の違いが見られる項目をいくつか見てみよう。

(1) debris

LPD² (英主)は /^hdeb ri:/ で、(英異)は /^hdeib-/ である。

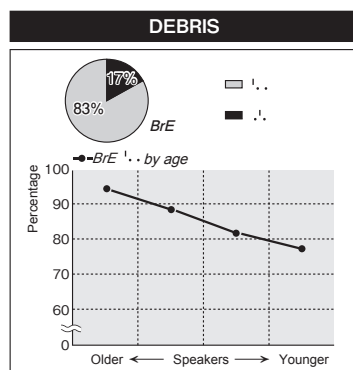
LPD³ LPD²と同じく(英主)は /^hdeb ri:/ で、(英異)は /^hdeib-/ に加え、新たに(米主)でもある /də 'bri:/ が入った。BrE 2007 pollによると、第1音節に強勢のある /^h./ の発音が83%、第2音節に強勢のある /^h./ の発音が17%である。

EPD¹⁷ (英主)は /^hdei.bri:/ で、(英異)は /^hdeb.ri:/ である。

CALD³ (英主) は /deb.ri:/ で、(英異) は /dei.bri:/ である。

MWALED (英主) は /dɛ.bri:/ である。

LPD³で(英異)に(米主)が加わったのは、BrE 2007 pollで、第2音節に強勢のある /ɪ/ の発音が17%で無視できないためであろう。アメリカ発音を見てみると、LPD²、LPD³、EPD¹⁷、CALD³、CDAE²、MWALEDにおいて、(米主)は第2音節に強勢のある発音 /ɪ/ であることから、これはアメリカ発音のイギリス発音への影響といえようか。LPD³の折れ線グラフからは、若い人ほど第1音節に強勢を置く発音を好む人が少ないことがわかる。参考までに、折れ線グラフと円グラフを載せておく。比較した辞典すべてにおいて(英主)はLPD³と同様、第1音節に強勢をもつが、EPD¹⁷では、LPD³で(英異)である二重母音をもつ /'dei.bri:/ が(英主)であり、CALD³と比べても(英主)と(英異)が逆である。



LPD³ p.212

(2) dissect

LPD² ((英/米)主) は /dɪ'sekt/ で、/dar-/ は ((英/米)異) である。

LPD³ LPD²で((英/米)異)であった /dar'sekt/ が(英主)となり、/dɪ-/ は(英異)となった。BrE 2007 pollの結果、/dar-/ が89% (1981年以降に生まれた人では95%)、/dɪ-/ が11%である。

EPD¹⁷ (英主) は /dɪ'sekt/ で、/dar-/ は(英異) である。

CALD³ ((英/米)主) は /dar'sekt/ である。

LPD²で((英/米)異)であった /dar'sekt/ が(英主)になった。BrE 2007 pollの結果で、二重母音の発音 /dar-/ が89%、短母音の発音 /dɪ-/ が11%というように /dar-/ のほうが優勢であることが反映されている。LPD³とEPD¹⁷で(英主)が異なり、EPD¹⁷では短母音をもつ発音が(英主)である。CALD³の((英/米)主)で /a/ がイタリック体になっていることから、この音は発音されてもされなくてもよいことを意味し、短母音と二重母音の両方が主要発音ということになる。

(3) during

ここでは最初の子音の変化について見てみよう。

LPD² (英主) は /'dʒuərɪŋ/ である。BrE 1998 pollの結果、子音の発音については、/'dʒ-/ 65%、/'dʒ-/ 34%、/'d-/ 2%である(ここでのパーセンテージの合計は101%となっている)。

LPD³ LPD²で(英異)であった /'dʒuərɪŋ/ が(英主)となった。BrE 2007 pollの結果、子音の発音は、/'dʒ-/ 54% (1981年以降に生まれた人では67%)、/'dʒ-/ 46%である。

EPD¹⁷ (英主) は /'dʒuə.rɪŋ/ である。

CALD³ (英主) は /'dʒuə.rɪŋ/ である。

MWALED (英主) は /'dʒuərɪŋ/ である。

BrE 1998 poll と比べて BrE 2007 poll のほうが、子音 /'dʒ-/ の使用が20%高まっている。この語の最初の子音に関して、EPD¹⁷、CALD³、MWALEDの(英主)は/'dʒ-/でありLPD³と異なる。

(4) kilometer

LPD² (英主) は /'kɪl ə ,mi:t ə/ で、/kɪ 'lɒm it ə/ は(英異)である。BrE 1988 pollでは、/'kɪl-/ が52%、/-'lɒm-/ が48%、BrE 1998 pollでは、/-'lɒm-/ が57%、/'kɪl-/ が43%である。

LPD³ LPD²の(英主)と(英異)が入れかわり、/kɪ 'lɒm it ə/ が(英主)になった。BrE 2007 pollによると、/-'lɒm-/ が63%で、/'kɪl-/ が37%である。

EPD¹⁷ (英主) は /kɪ'lɒm.i.tə/、/'kɪl.əʊ.mi:-/ は(英異)である。

CALD³ (英主) は /'kɪl.ə.mi:.tə/ である。

LPD³でLPD²の(英主)と(英異)が入れかわった。BrE 1988 poll、BrE 1998 poll、BrE 2007 pollを見るとしだいに/-'lɒm-/の割合が高くなり、BrE 2007 pollでは63%になっていることを反映したものであろう。LPD³での変更により、LPD³の(英主)とEPD¹⁷の(英主)の強勢の位置が同じになった。CALD³は(英主)が/'kɪl-/であり、LPD³とEPD¹⁷の(英主)と異なる。LPD³のこの変化は、LPD²に掲載されて

いるAmE 1993 pollでは、/-'lɑ:m-/ が84%、/'kɪl-/ が16%であることや、CALD³とCDAE²の(米主)の強勢の位置を見て、LPD³の(英主)と同じであることから(MWALEDは(米主1)が第2音節に、(米主2)が第1音節に第1強勢がある)、イギリス発音へのアメリカ発音の影響がうかがえる。

(5) lamentable

LPD² (英主) は /'læm ənt əb l̩/ で、/l̩ ə'ment-/ は(英異)である。

LPD³ LPD²で(英異)であった/l̩ ə'ment əb l̩/ が(英主)となり、(英主)であった/'læm ənt-/ は(英異)となった。BrE 2007 pollでは、/-'læm-/ が72%、/'læm-/ が28% (1942年以前に生まれた人では44%)である。

EPD¹⁷ (英主) は /'læm.ən.tə.bl̩/ で、/l̩ ə'men-/ は(英異)である。

CALD³ (英主) は /l̩ ə'men.tə.bl̩/ で、(英異)は /'læm.ən-/ である。

BrE 2007 pollの結果で、/-'læm-/ と /l̩ ə'men-/ がそれぞれ72%と28%のように開きがある。CALD³では(英主)は、LPD³(英主)と同じく第2音節に強勢があるが、EPD¹⁷では(英主)は第1音節に強勢があり、LPD³の(英主)と異なる。アメリカ発音を見ると、LPD²、LPD³、EPD¹⁷、CALD³、CDAE²の(米主)において第2音節に強勢があることから(MWALEDは(米主1)が第2音節に、(米主2)が第1音節に強勢がある)、この変化はアメリカ英語の影響ともいえるであろうか。

(6) liquorice

LPD² ((英/米)主) は /'lɪk ərɪs/ で、((英/米)異)は /ɪf/ である。

LPD³ ((英/米)主) は /'lɪk ərɪf/ で、((英/米)異)は /ɪs/ となり、LPD²の((英/米)主)と((英/米)異)がLPD³で入れかわった。BrE 2007 pollで

は、/ɪf/ が83% (1981年以降に生まれた人は92%)、/ɪs/ が17%である。

EPD¹⁷ /lɪk.ɹɪs/ が (英主) で、/ɪf/ は (英異) である。

CALD³ (英主) は /lɪk.ɹɪs/ で、(英異) は /ɪf/ である。

LPD²の((英/米)主)と((英/米)異)がLPD³で入れかわった。BrE 2007 pollの結果で、/ɪf/と/ɪs/でそれぞれ83%と17%のように開きがあるが、EPD¹⁷とCALD³の(英主)は/ɪs/であり、LPD³の(英主)と異なる。

(7) necessarily

LPD² /nes ə 'ser əl i/ が ((英/米)主) で、/nes əs 'r əl i/ は ((英/米)異) である。BrE 1998 pollでは、/ɪ.../ が72%、/ɪ.../ が28%である。

LPD³ LPD²と同じく、/nes ə 'ser əl i/ が ((英/米)主) で、/nes əs 'r əl i/ は ((英/米)異) である。BrE 2007 pollでは、/ɪ.../ が68%、/ɪ.../ が32%である。

EPD¹⁷ /nes.ə.sɹ.ɪ.i/ が (英主) で、/nes.ə'ser-/ は (英異) である。

CALD³ ((英/米)主) は /nes.ə.ser.ɪ.l.i/ である。

BrE 2007 pollで、/ɪ.../の使用がBrE 1998 pollと比べて4%低くなっているものの、優勢であることには変わらない。EPD¹⁷の(英主)とCALD³の((英/米)主)は/ɪ.../で、LPD³の(英主)と異なる。

3.3 BrE 2007 pollで調査された語について、LPD²とLPD³で発音に変化があるので、LPD³の主要発音と、本稿で比較した他の辞典に掲載されている主要発音と

の間で表記の違いはないが、発音の変化の一端をつかめる項目をいくつか見よう。

(1) LPD³において((英/米)主)の主要度が高まったもの

Asia

LPD² ((英/米)主) は /'eɪz ə/ で、((英/米)異) は /'eɪf ə/ である。BrE 1998 pollによると、/eɪf ə/ が49%で、/eɪz ə/ が51%である。

LPD³ LPD²と同じく、((英/米)主) は /'eɪz ə/ で、((英/米)異) は /'eɪf ə/ である。BrE 2007 pollによると、/eɪz ə/ が64%で、/eɪf ə/ が36%である。1942年以前に生まれた人では、/eɪz ə/ が32%で、/eɪf ə/ が68%である。

BrE 1998 pollとBrE 2007 pollを比べて、/eɪz ə/を好む人が13%増えている。このことは、LPD²掲載のAmE 1993 pollの結果、/eɪz ə/が91%で、/eɪf ə/が9%であることや、EPD¹⁷の(米主)が/eɪ.zə/であることを見て、アメリカ発音のイギリス発音への影響がうかがえる。CDAE²とMWALEDにはこの語の掲載はない。

(2) LPD³において(英異)の使用度が高まったもの

contribute

LPD² (英主) は /kən 'trɪb ju:t/ で、/'kɒntr ɪ bjʊt/ は (英異) である。BrE 1988 pollでは、/ɪ.../ が73%で、/ɪ.../ が27%である。

LPD³ LPD²と同様、(英主) は /kən 'trɪb ju:t/ で、/'kɒntr ɪ bjʊt/ は (英異) である。BrE 2007 pollによると、/ɪ.../ が59%で、/ɪ.../ が41%。1942年以前に生まれた人は/ɪ.../が84%で、/ɪ.../が16%である。

LPD³では(英異) /ɪ.../が、BrE 1988 pollとBrE 2007 pollを比較すると14%増えている。アメリカ発音を見ると、LPD²、LPD³、EPD¹⁷、CDAE²、MWALEDにお

いて(米主)は第2音節に強勢がある。CALD³は(米主)に /'kɑ:n-/ が掲載されているが、このアメリカ発音について筆者がCambridge University Pressに問い合わせたところ、“... this is an error. The usual pronunciation in American English is with primary stress on the second syllable.”⁸⁾との回答があり、CALD³も第2音節に強勢があることになる。これらのことから、contributeのイギリス発音は、(米主)でない発音の割合が高まっていることがわかる。

3.4 ここでは、BrE 2007 pollの結果がLPD³の表記に反映されておらず、Wells氏に筆者が私信でその理由を尋ねた項目について見てみよう。Wells氏は以下の3つの項目について、“Mainly because the results of the opinion poll were not available until after the text had been finalized.”と回答している。詳細は以下の項目中で記すことにする。ここでのWells氏のコメントについてはすべて注7)を参照していただきたい。

(1) diphthong

LPD² (英主)は /'dɪf θɒŋ/ で、(英異)は /'dɪp-/ である。

LPD³ LPD²と同じく(英主)は /'dɪf θɒŋ/ で、(英異)は /'dɪp-/ である。

BrE 2007 pollでは、/'dɪf-/ が39%で、/'dɪp-/ が61%であることから、(英主)は /'dɪp-/ となるはずだが、意見調査の結果がLPD³の表記に反映されていない。その理由についてWells氏から、“Phoneticians pronounce this with -f-, even though the general public may not.”という回答を得た。つまり、意見調査結果ではなく音声学者の発音を掲載したことになる。EPD¹⁷、CALD³の(英主)は /'dɪf-/ で、(英異)は /'dɪp-/ であり、BrE 2007 pollの結果とは異なる表記となっている。

(2) hurricane

LPD² /'hʌr ɪk ən/ が(英主)で、/-ɪ kem/ は(英異)である。

LPD³ LPD²と同じく /'hʌr ɪk ən/ が(英主)で、/-ɪ kem/ は(英異)である。

BrE 2007 pollでは、/-kən/ が40% (1942年以前に生まれた人は70%)で、/-kem/ が60%であることから、(英主)は /-kem/ となるはずだが、ここでも意見調査の結果がLPD³の表記に反映されていない。その理由についてWells氏からの回答は、“I prioritized my own pronunciation.”であった。つまり、意見調査結果ではなくWells氏自身の発音を優先したことになる。EPD¹⁷とCALD³でも短母音をもつ発音 /-kən/ が(英主)で、二重母音をもつ発音 /-kem/ が(英異)であり、MWALEDも(英主)は /-kən/ である。つまり、BrE 2007 pollの結果とは異なる表記である。

(3) impious

LPD² ((英/米)主)は /'ɪmp i_əs/ で、((英/米)異)は /_0ɪm 'paɪ_əs/ である。

LPD³ LPD²と同じく((英/米)主)は /'ɪmp i_əs/ で、((英/米)異)は /_0ɪm 'paɪ_əs/ である。

BrE 2007 pollでは、/'ɪmp-/ が47% (1942年以前に生まれた人は63%)で、/-'paɪ-/ が53%であることから、((英/米)主)は /-'paɪ-/ となるはずだが、ここでも意見調査の結果がLPD³の表記に反映されていない。LPD³には“The traditional, irregular pronunciation 'ɪmp i_əs has lost ground in favour of _0ɪm 'paɪ_əs”とあるにも関わらずなぜなのか、その理由について、Wells氏からhurricaneの場合と同じく、“I prioritized my own pronunciation.”との回答があった。EPD¹⁷の(英主)は /'ɪm.pi.əs/ で、/ɪm'paɪ-/ は(英異)であり、CALD³の((英/米)主)は /'ɪm.pi.əs/ であり、主要発音の強勢の位置がBrE 2007 pollの結果と異なる。

これらの語の主要発音に意見調査結果が反映されていない理由は、辞典編纂時期の問題と、意見調査よりも専門家の見解を反映させたためといえる。確かに、LPD³においてdiphthongには、意見調査の数値の後に“Phoneticians, however, prefer 'dɪf-.”

との記述があるが、hurricaneとimpiousには音声学者の発音を優先したといった注記は見られない。LPDの大きな特徴の一つは意見調査であろう。エントリーによって、意見調査の結果が反映されたり、そうでなかったりするのは、実際の言語事実を反映しているかという点では検討される余地があるのではないだろうか。少なくとも、このような場合には、辞典使用者に誤解を与えないような注記が添えられてもよいのではないだろうか。

4 本稿で取り上げたいいくつかの語を見ても、英語発音に変化があることは明らかである。また、LPD³の主要発音が必ずしも他の辞典の主要発音と一致するとは限らないことから、発音の多様性と揺れを改めて確認することができる。発音は地域、年齢などによって様々であることはいままでもない。主要発音と変異発音の使用度には両者の間に大きな開きがある場合もあれば、両者の使用頻度の差がわずかで、競り合っている場合もある。英語学習者に推奨される主要発音は注目される場所であるが、実際、どの発音が主要発音で、どの発音に変異発音かの判断は語によって容易でない場合もあるであろう。学習辞典の編纂においては、どのようなデータに基づいてどの発音を掲載するかが問題となるであろうし、辞典の間で発音表記が必ずしも一致しないということは、教室においても学習者にどの発音を教えるか慎重な態度が必要とされるといえよう。そうであるからこそなおさら、英語発音の現状をとらえようとし、英語話者や学習者にとって発音のガイド役となってくれるLPDのような発音辞典の今後の展開にさらに期待したいと思う。

Notes

- 1) Daniel Jonesの*English Pronouncing Dictionary (EPD)*の初版は1917年にJ. M. Dent & Sons Ltdから出版され、後にCambridge University Pressにpublishing rightsが移り、2006年には第17版が出版されており、初版からおおよそ90年の間に16回の改訂があったことになる。1997年出版の第15版からは、すべてのエントリーがデータベース化されていることから、今後さらにスピードを増して音声の変化が辞典の表記に反映されていくことであろう。EPD¹⁷には80,000を超えるエントリーと220,000のイギリス英語とアメリカ英語両方の発音情報が掲載されている。
- 2) MWALDは掲載している発音について、“Most of the pronunciations in this dictionary should be considered standard American pronunciations, showing how words are typically

pronounced in many parts of the United States” (p.12a) .さらに、“British pronunciations are shown when the most common British pronunciation is very different from the American pronunciation” (p.12a) .と記述している。

- 3) J. C. Wells' UCL Website. <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells> (accessed October 7, 2008).
- 4) Paul Heacock, Publishing Manager at ELT Dictionaries and Corpus Cambridge University Press. e-mail message to author. November 5, 2008.
- 5) Paul Heacock, Publishing Manager at ELT Dictionaries and Corpus Cambridge University Press. e-mail message to author. November 7, 2008.
- 6) Joshua S. Guenter, Editor of Pronunciation at Merriam-Webster, Inc. e-mail message to author. November 6, 2008.
- 7) J. C. Wells. e-mail message to author. October 15, 2008.
以下本稿で取り上げるWells氏のコメントはすべてこのe-mailからである。
- 8) 注4) に同じ。

References

- 藤本和子・山本千之. 2001. 「Longman Pronunciation Dictionary改訂新版」[英語英文学研究] 第48号, 75-84. 創価大学英文学会.
- Gimson, A. C. 2008. *Gimson's Pronunciation of English*, 7th ed. Rev. Alan Cruttenden. London: Hodder Education.
- Jones, Daniel. 2006. *Cambridge English Pronouncing Dictionary*. 17th ed. Ed. Peter Roach, James Hartman, and Jane Setter. Cambridge: Cambridge University Press. (EPD¹⁷)
- Wells, J. C. 1990. *Longman Pronunciation Dictionary*. Harlow: Longman Group UK Limited. (LPD¹)
- _____. 2000. *Longman Pronunciation Dictionary*. 2nd ed. Harlow: Pearson Education Limited. (LPD²)
- _____. 2008. *Longman Pronunciation Dictionary*. 3rd ed. Harlow: Pearson Education Limited. (LPD³)
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 3rd ed. 2008. Cambridge: Cambridge University Press. (CALD³)
- Cambridge Dictionary of American English*. 2nd ed. 2008. New York: Cambridge University Press. (CDAE²)
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*. 2008. Mass.: Merriam-Webster, Incorporated. (MWALD)
- J. C. Wells' UCL Website. <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells>.